

●山尾 絢香 (2002～)

『理想の檻』(2026)

ソロ・チェロのための

■プロフィール

広島県出身。人間の弱さとすべての肯定をテーマの中心として掲げており、現代社会に生きる人間が抱える問題を肯定へ導くプロセスの共有を目指している。これまでに作曲を徳永崇、神山奈々、久保哲朗に師事。広島大学卒業後、東京音楽大学大学院に在学中。

プログラム・ノート

本作品のテーマは鬱病である。人が鬱病になっていく過程を、音を介して追体験し、理解し、再解釈することを目的としている。今回はその一例として、「こうでなければいけない」という強い価値観や、固定観念によって、自らを縛り、追い詰めていく姿を描いた。楽曲の中では使える弦や音色が増えていく一方で、音価や奏法などによる身体的な拘束を強めていくことで鬱病を構造的に示した。本作品における鬱病の描写は、実際に鬱病を患う私の友人への聞きとりをもとにしている。そして執筆中、私はその友人の訃報を受けた。私はただ、彼の精神と共にありたい。

●近藤 碧 (2001～)

『スリップ・ダウン』(2026)

ヴァイオリンとヴィオラのための

■プロフィール

国立音楽大学作曲専修を首席で卒業し有馬賞を受賞。現在国立音楽大学大学院作曲専攻作品創作コースに奨学金給付生として在学中。作曲を宮城純一、菊池幸夫に師事。みちのく青葉の作曲家代表。

プログラム・ノート

ヴァイオリンとヴィオラによる繊細な音響の変容を軸に構成された作品である。最高音域から揺れ、徐々に「滑り落ちて」いきながら、音程や響きが徐々に変容する様を構築した。静止した時間感覚の中から機械的な反復へと推移し、緊張と崩壊を往還しながら、二つの弦楽器が不安定な音響空間を形成していく。

●黄 昱斐 (2000～)

『ヴィセラル・メカニクス』(2026)

ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための

■プロフィール

2000年中国生まれ。コーネル大学で心理学を専攻、音楽を副専攻。卒業後より作曲を学び、心理学的視点を創作に取り入れる。現在、桐朋学園大学大学院修士課程に在学中。これまで作曲を久行敏彦、正門憲也、金子仁美、ピアノを飯野明日香、指揮を篠崎靖男に師事。

プログラム・ノート

本作は、強い緊張の中で感じる身体と心の変化をもとにしている。静かな時間の中で、短い音の素材が少しずつ形を変えながら広がり、内側にある不安定な感覚を表していく。全体は遅いテンポを中心に進むが、その中で細かな動きや響きの変化が重なり、少しずつエネルギーが蓄積されていく。終盤では、それまで抑えられていた力が一気に現れ、激しい響きへと向かう。疲労、不安定さ、集中、そして時間とともに変化していく記憶の感覚を音にした作品である。